

## 第2回中部 NGO - JICA 中部地域協議会議事要旨

### 1. 開会挨拶

大貝（JICA 中部）

本年2月に開催された第一回地域協議会から半年間が経過し、JICA でもいろいろな動きがあった。中でも、理事長、副理事長が交替したことが大きい。早速 JICA 中部に来訪、主要ステークホルダー等との面談を行った。これは、地域や国内センター重視の方針の表われと認識。

先日（8月3日）、本年度第一回 NGO-JICA 協議会（全国）が東京で行われ、JICA より田中理事長が初めて出席。また初めて TV 会議で繋いだ協議会となったので、JICA 中部も名古屋 NGO センター関係者とともに参加した。地域との連携の重要性や中部におけるこの協議会に言及があった。今回も議論を深めていきたい。

### 2. 参加者自己紹介（出席者リスト参照）

### 3. 協議事項「本地域協議会設置の意義について」

森本（JICA 中部）

JICA 側でまとめた案と、NGO 側がまとめた論点のペーパーを用意した。JICA 案では、第一に、市民社会の定着と質的発展。NGO との協働が進んできて、今後の発展のためには協議していく場が必要という認識。

第二に、新しい公共を背景としたアクターの多様化し、国際協力では大学、自治体、企業と担い手が増え、手法もフェアトレード、BOP、ビジネスと多様化してきている。関係者が知見を共有して新たなものを作っていくための場の設置という意義。

第三に、3. 1 1 を背景に、国内の課題にも取り組むこと（内外一元化）。海外での経験を国内に活かす必要や、国内で活動してきた NPO との接点が出てきた。そうした交流のプラットフォームとしても有用ではないかと考える。

龍田（NANGOC）

「JICA の持つ市民参加の枠組みを通して連携がすすんできた」ととれるが、違う意味もある。この地域では、県と市と JICA と NGO が組んで、より大きな枠組みで JICA と NGO の関係の質が変わってきた。担当者間の協議、相談する関係の強化によっても変わってきた。枠組みがなくてももとの関係はあった。そうした点も検討したい。東日本大震災の後、地域の小さい NGO の役割も大きくなっていると認識する。地域の NGO の特性を生かしたような連携も模索したい。地域の中小の NGO の実情に合ったようなスキームがあるといい。地域の課題に

向き合う事業スキームもあるとよい。

JICA と NGO は文化、組織が違う。お互いの組織や事業について互いに理解を深める必要がある。対話を通じて互いを知りあうこと、対等なパートナーシップが重要。また、おかしいと思ったことは言い合う「相互チェック」も重要。パートナーシップについては、対等なパートナーシップとは何かを常に話し合う事が重要。「質的向上」のところは、NGO の質的向上は必要と思うが、専門性が高い NGO もあるので、もう少し議論したい。

森本（JICA 中部）

JICA 側、NGO 側からの設置の意義のペーパーに関する考え方について、フロアからご意見を頂戴したい。

山本（JICA 中部）

「質的発展」については、NGO の組織としての質的向上を言っているのではないと理解している。何を意味しているのかわかりにくいので、もう少し詳しく書く必要がある。

二点目は、中小の NGO の果たしている役割や良さがあると思うが、そうした NGO の声をきちんと聴く方策なども考える必要があるのではないか。

井坂（JICA 中部）

「質的発展」について補足したい。「NGO の質的向上」ではなく、「市民参加の質的向上」という意味である。短い文章で言葉が不足したが、市民参加が定着はしてきたが、まだ一部の人たちの間のものであり、拡大を含めた質的発展が必要という意。JICA 側も努力していくべきことであり、市民参加がもっとしやすくなるスキームを作る、変化させるなど含めた質的発展である。

大貝（JICA 中部）

ペーパーが JICA の言葉使いで記載されている印象とのご指摘は理解できる。ただ、「3. 1 1」に係る意義を書いたのは、中部地域において、地域 NGO と JICA 中部との良好な関係がある程度できてきた中で、あえてここで地域協議会を設置する意味の問いかけに対する答え。「この国難の時期に国際協力か」というお叱りがあったことも事実だが、多くの途上国から激励のメッセージや多額の支援金をいただいた。途上国と日本、東京と各地域との関係性が深化してきたこと、相互依存性、双方向性の重要性が意識されたことが大きいと思う。龍田さんがおっしゃった 5. のポイントは私の心の中にスッと落ちたコメントで、反映していただいてよいと思う。

また地域の課題に向き合うという視点が、むしろ JICA や ODA に不足していたのではないかと強調したい。地域の特色、その地域で活動している NGO の特性を生かした連携・協力も非常に重要なポイントになる。東京から地域への一方的な発信ではなく、JICA 中部と中部地域の NGO が協議をして、問題意識を発信していくことが重要であり、進めていきたい。そこにこそこの協議会の設立の一つの目的があると考えます。龍田さんからの 5 つのポイントの中でも、特に、この二点についてはより共感する。

龍田 (NANGOC)

今頂いたご意見も参考にしながら、ひとつにまとめる作業をしていく。次回の協議会に向けて、双方に投げ、コーディネーター会議で取りまとめることとする。(合意確認)

#### 4. 協議事項「NGO-JICA 協議会を受けて」

龍田 (NANGOC)

8月3日に JICA 地球ひろばで、中国・中部・関西・北陸の地域センターとをテレビ会議システムでつないで行われた。協議事項の一つ目は、草の根技術協力事業が開始されてから 10 年が経ち、その成果を振り返り、まとめること。JICA では成果をまとめ予算要求に反映させていくとのこと。また、草の根技術協力に対する評価のタスクを共同で立ち上げて、両者で評価をしようということ。その際、地域の代表がどう加わるかが一つの課題。今後話し合っていくことになる。

JICA ボランティア事業に関するタスクフォースからは、NGO がボランティア事業をいかに共同でやっていくかにつき技術協力していると報告があった。派遣前の研修を NGO に開放するという事で進めている。シャプラニールともう一つの NGO から 1 名ずつで開始される予定。

「なんとかしなきゃ！プロジェクト」は Facebook を導入しているが、更なる活性化の方策を検討している。

草の根技術協力の精算業務の合理化について議論された。一つは領収書の取り方。細かいルールがあるが、それをどこまで簡略化できるかという点で検討されている。また、外部監査を導入することにより、現在は全件チェックしているが、それを(外部監査によって)簡略化できないかという議論がある。

人件費に対する間接経費の付け方については、現在、日本人の人件費に対してのパーセントだが、それを全事業費についての割合とする形に変えようという議論がなされている。管理費がどれぐらいかかるか、100 ぐらいの NGO で調査をして値を決めようとして協力をお願いしている。

JICA 基金については、JICA が一般から基金を集めて、その原資から大体年間百万円の予算で小さな NGO 向けに資金を提供するもの。ボランティア貯金の利子などもここに投与されている。700-800万円ほど。今年の予算は確保できて、7, 8の団体に提供するという報告を受けている。また、地球ひろばの NGO 向けの研修を JANIC が契約し、評価もよかったという報告があった。

NGO と JICA の連携について。3. 11前から不況などの影響で国民の意識が内向きになり、どうやって理解を得て国際協力を発展させていくのかが課題になり、そのために国内においても連携をしていこうとしている。特に、地域連携と本邦研修と、事例集の作成を扱うということで進んでいる。

地域連携については次回の協議会を広島で開催し、中部の NGO は私（龍田）が参加予定。中部での連携についても PR していきたい。

また、小さい NGO とどうつながるかは重要な課題。草の根事業の予算規模が頭打ちで、予算枠を拡大してきたものの、今後制度をどうしていくか NGO とともに話していくことになっている。

大貝（JICA 中部）

補足だが、ANT-Hiroshima の渡部代表が、ミンダナオでの平和構築について為された発表に、名古屋 NGO センター副理事長の山崎さんがコメントされたのが印象的であった。地域 NGO 同士の連携の芽が見える様な気がした。そして、JICA もそれをサポートできるような新たな方向性が生まれてくれば非常に素晴らしい。

山崎（NANGOC）

AHI で10年間ミンダナオで委託事業を受けていて、その経験が活かされるのではないかと申しあげたら、AHI が既に研修の一環として広島に行っていて、NGO 間の連携は進んでいるということだった。当時の JICA の担当者がとても関心を示した。参加型は今では当たり前だが、当時は一緒に作っていくみたいなコンセプトで双方ががんばった。そういう人的なネットワークが育ってきている。

西井（NANGOC）

AHI の研修は、JICA との文化の違いを一步一步すり合わせしながら進めた。会場の作り方、椅子ひとつ動かすのも JICA と相談し、苦勞しながら作り上げたと聞いた。イコールパートナーシップの連携としては中部地域では最初の事例ではないか。私もその流れの中でミンダナオを訪問し、立ち入り制限のある地域を案内してもらった。

大貝（JICA 中部）

中部の人間としては誇らしい経験。それを新しい方向につなげられれば良いと思う。

龍田（NANGOC）

元研修生の資産をうまく活用できないかと NGO サイドでは考えているの、今後相談させてほしい。

#### 5. 協議事項「協働ハンドブック作成手順について」

森本（JICA 中部）

第6章を、各種事業の協働の成果集というということで、事例の経緯、歴史、目的、成果ごとにまとめていきたい。草の根技術協力、国際理解教育セミナー、ワールドコラボ、国際協力カレッジ、開発教育指導者研修および教師海外研修など。JICA、NGO 側で担当者を確定し、担当者が協議をして骨子を固めていく。日程は、当初は9月にハンドブックを完成と想定していたが、実際9月末までにできるかは議論があるであろう。

龍田（NANGOC）

広報セミナーも入れてはどうか。JICA 側担当者の方は大体決まった。NGO サイドから担当者のリストを送るなどする。

森本（JICA 中部）

アプローチする団体の範囲をどうするか。現時点においてはすでに草の根技術協力の案件がすでに終わっている団体等についても JICA の方から特に教訓や好事例等が引き出せるものがある団体についてはコンタクトさせて頂くことよいか。

山本（JICA 中部）

事業によって、自ずと纏め方は異なってくるのではないか。

森本（JICA 中部）

どういう形で協働の成果のエッセンスを抽出するか、ある程度、他の協働の事例とは違った形にせざるを得ないのではないか。

井坂（JICA 中部）

単に事業のまとめをするわけではなく、協働という視点で見たときにどうい

Good Practiceがあったかということがポイント。そこをもう少し詰める必要がある。

山本（JICA 中部）

統一的視点を共有しないと出来上がりがばらばらになってしまうのではないか。

井坂（JICA 中部）

作業を進めていくプロセスも協働がよいと思うので、草の根（事業）の実施団体や NGO の代表のみなさんに話し合いの枠組みに入っただけなら良いと思う。

龍田（NANGOC）

この地域協議会に参加する団体は地域の NGO 等ということで、いろんな団体に入ってもらうことは問題ない。

龍田（NANGOC）

草の根事業に関わっている団体すべてを取りまとめることは可能か。その一方で NGO センターに決める権限はない。声をかけて反応のあった団体に加わってもらうことでよいのではないか。

山崎（NANGOC）

共通の課題は感じていても言語化されていない。NGO の（草の根）事業経験者が集まり、よかった点や改善すべき課題を出し合う機会を設定してはどうか。

森本（JICA 中部）

質問フォームをこれまで草の根技術協力に関係した団体に送付し、好事例、教訓を集める方法もあるのではないか。

大貝（JICA 中部）

本件については、いろいろ話が出てきてよかった。当初、9月末でまとめ、10月の第二回で成果を報告と考えていたが、そのようにはいかないことがわかった。今ここでいただいたご意見を踏まえ、引き続きコーディネーター中心にご検討頂きたい。特に草の根事業は重要な観点であるが、その取り纏めについてどう取り組むかに関しては、コーディネーターにご検討していただくことではないか。

森本（JICA 中部）

そういう形でコンセンサスを得て、コーディネーターの方で一度考えて、進めさせていたいただきたい。

龍田（NANGOC）

いただいた意見を参考にしながら次のステップに進めることとしたい。

## 6. 報告事項

（1）JICA 大貝所長により「JICA 中部の動向（JICA の民間連携を含む）」について報告。

山崎（NANGOC）

帰国隊員の報告会に、名古屋 NGO センターとして、就職先としての NGO という道もあることを紹介できればよいと思う。

大貝（JICA 中部）

うれしいご提案。帰国報告会等に関してはまたご連絡させていただく。

（2）JICA より国際ロータリークラブ国際奉仕委員会において、JICA の民間連携とともに、NGO との協働、特に名古屋 NGO センターの NGO 相談員としての役割を紹介したことについて報告。ロータリークラブは国際協力に関心があるが支援先がわからないので、マッチングの支援を求めているとのこと。

（3）名古屋 NGO センター門田事務局次長より「NGO による東日本大震災復興支援」について報告された。

## 7. 閉会挨拶

西井（NANGOC）

ここ数年の間に JICA と NGO の連携は広がってきた。昨年の中日本大震災をきっかけに、途上国の課題と日本国内の課題が共通しているという認識を、JICA も NGO も持った。こうした経験を通して、解決すべき課題について問題意識を共有する土台ができてきたといえる。一方、考え方の違いや文化の違いも明らかになってきている。相互の違いを認め合いながら、途上国の課題と地域の課題を解決するため、さらに協働を進めていきたい。

以上